

大学名	東洋大学		
University	TOYO UNIVERSITY		
外国人研究者	アラタン宝力格		
Foreign Researcher	ALATANBAOLIGE		
受入研究者	小林 良二	職名	教授
Research Advisor	KOBAYASHI RYOJI	Position	Professor
受入学部/研究科	社会学部		
Faculty/Department	Faculty of Sociology		

<外国人研究者プロフィール/Profile>

国籍	中国
Nationality	China
所属機関	内モンゴル財経大学
Affiliation	Inner Mongolia University of Finance and Economics
現在の職名	准教授
Position	Associate Professor
研究期間	2015. 12. 1ー2016. 2. 28
Period of Stay	2015.12. 1ー2016. 2.28
専攻分野	社会福祉
Major Field	Social Welfare



研究室にて/Desk Work

<外国人研究者からの報告/Foreign Researcher Report>

①研究課題 / Theme of Research

1. アジアの国々の中で中国における社会福祉及びソーシャルワークのローカル化はかなり遅れており、また内モンゴルのような民族地域における再ローカル化はさらに遅れている。
2. 日本ではあまり例を見ないが、中国において西洋からの理論、倫理、研究、教育、実践等はまず中国本土でローカル化される必要がある上に、地方地自体ではそのローカル化されたものがさらにローカル化、いわば再ローカル化される必要がある。なぜかという、民族、民族地域によってクライアントのニーズとニーズの表れ方はかなり差があるからである。
3. 内モンゴルの各大学において大学生たちは単なる理論、倫理、方法等を勉強し、それらを駆使した実践はほとんど行っていない。また大学での教育等は試行的ものが多く、ソーシャルワークの理論及び実践教育自体が一つのシステムになっていない。

②研究概要 / Outline of Research

1. 日本で西欧のソーシャルワーク教育が歴史的にどのように紹介され、どのように受容されていったかについての研究。
2. 日本の大学におけるソーシャルワーク教育のカリキュラムについての研究。
3. 社会福祉の現場で働くソーシャルワーカーとの交流によって、現在のソーシャルワークがどのように展開されているかについての研究。
4. 日本の地域福祉がどのように展開され、また住民は日常生活ないし社会生活の基盤である地域を拠点としてそこで自助、互助、共助、公助等はどのように行われているかを研究する。

③研究成果 / Results of Research

1. 日本のソーシャルワーク教育の歴史的内容を本、論文等を通して理解し、それらがどのように西洋から日本へと紹介され、またローカル化されたかを理解できた。更に、指導教員との話の中から日本の社会学者であった鈴木栄太郎と有賀喜佐衛門の著作を知り、それらを読んで今後の研究に必要ないくつかのヒントを得た。それは主に、農村社会の構造、都市社会の構造及び住民の地域生活に関わる社会福祉の思想的な内容である。
2. 複数の大学の先生方と行った討論・検討と大学生の実習報告会に出席したことから自大学におけるソーシャルワーク教育改革に関わるいくつかの知見を得た。それらはカリキュラムの編成、実習指導等に関わる内容である。
3. 地域コーディネーターとの交流により、日本の福祉現場において対人援助は具体的にどのように展開されているを理解でき、内モンゴル牧畜地域において行いうるいくつかの実践内容を確認できた。

④今後の計画 / Further Research Plan

- 今回の短期研究を通して予想外の収穫も得ることができた。これを含めて今後以下のような研究活動を行いたく思っている。
1. これからの研究方向に関しては、貧困研究は当然基礎になるが、都市より農村及び牧畜地域における住民の生活問題を研究し、それらの問題がどのようなメカニズムで発生しているかを明らかにし、また農村と牧畜地域の問題を比較検討してみたい。
 2. 1で行った研究を基礎に地域福祉及び地域福祉における自助、互助の視点から日本と内モンゴルの比較研究を行い、そこで東アジアで共通して見られる福祉思想的なものがあるかどうかを確認したい。また、これらの研究活動を通して、日本の地域における対人援助実践が内モンゴルの地域福祉の発展対して参考になりうる内容を発見したい。

<受入研究者からの報告/Research Advisor Report>

①研究課題 / Theme of Research

日本では戦後、社会福祉制度の導入・定着に向けてさまざまな取り組みが行われてきたが、中国においても改革開放後、経済社会体制の変動に対応する社会福祉諸制度の導入が急速に行われている。しかし、中国全体、特に当該研究者の所属する内モンゴル地区では、社会福祉の研究、教育、実践についての方法が確立されておらず、社会福祉の指導者を育成するための大学教育は行われていても、各大学における大学生たちの育成には大きな課題がある。このような状況を踏まえて、当該研究者は、本学で博士学位を取得して大学に勤務した後、3年半ぶりに来日し、より広い視野から日本の社会福祉とソーシャルワークの理論及び実践教育についての見聞を広めることを課題とした。

②研究概要 / Outline of Research

当該研究者への研究指導の概要は次のとおりである。

1. 日本で西欧のソーシャルワーク教育が歴史的にどのように紹介され、どのように受容されていったかについての研究に対する助言を行った。
2. 日本の大学におけるソーシャルワーク教育のカリキュラムについての研究を行うに際しての助言を行った。
3. 社会福祉の現場で働くソーシャルワーカーを紹介し、地域におけるソーシャルワークがどのように展開されているかについての知見を広めるように支援した。
4. 日本の地域福祉に関するシンポジウムなどを紹介し、地域福祉に関する実践がどのように行われているかについての見聞を広められるように支援した。また、住民の日常生活ないし社会生活において、自助、互助、共助、公助等はどのように行われているかについて知見を広められるように支援した。

③研究成果 / Results of Research

以下、研究概要に沿って、成果を報告する。

1. については、日本のソーシャルワーク教育の受容過程に関する著書や論文を紹介し、西欧の社会福祉がどのように日本で受容されたかについて討議を行った。特に、戦後間もないころの鈴木栄太郎と賀喜佐衛門の著作を学んだことは貴重な成果となったようである。
2. については、いくつかの大学の先生方の研究会に参加して討論の機会を得たり、大学生の実習報告会に出席したことにより、当該研究者の大学における今後のソーシャルワーク教育改革に関わる多くの知見を得ている。
3. については、地域福祉コーディネーターとの交流を通して、日本の福祉現場における対人援助の実際を学んでいる。
4. については、この時期に開催されたシンポジウムに参加し、地域社会及び地域福祉のシステムについて学んだ。これらの成果を受入研究者の所属する大学で報告し、参加者に大きな感銘を与えた。

④今後の計画 / Further Research Plan

当該研究者にとっては3年半ぶりの訪日であったが、前回の滞在が学位論文作成という関心に絞られていたのに対して、今回の滞在中は、文献の理解に限られないより広い視野から日本を理解できるようになったとのことである。したがって、今後は次のような交流が考えられる。

1. 社会福祉研究への関心だけでなく、教育、実践上の方法やシステム作りについても視野を広げる際の助言を行うこととしたい。
2. 日本との関係では、受入れ大学である本学（東洋大学）が今後の国際交流を進めるにあたって、当該研究者が内モンゴル地区における拠点大学のカウンターパートとして活躍できるように支援したい。このような交流の展開によって、日本における社会福祉の成果を東アジアの諸国に伝えていく際の支援にあたりたい。



研究報告会/The Briefing Session in Japan



東洋大学アジア文化研究所年次集会にて/Meeting of The Asian Cultures Research Institute of Toyo University